
ファントムガーディアン

レンコン畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファントムガーディアン

【Nコード】

N8925G

【作者名】

レンコン畑

【あらすじ】

仲のよかった妹はある日を境に兄を避けるようになる。仲を戻そうと奮闘するもわけのわからないまま異世界に召喚されてしまい、妹とは離れ離れになってしまう。そしてその異世界は女性至上主義な世界。召喚された主人公は異世界「ファンタジア」の姫を守るガーディアンとして過ごす事になるのだが…

ブローグ1（前書き）

ブローグ1という事で2もあります

プロローグ1

——朝

目覚ましが鳴りだし、カーテンが開かれる

窓から朝日の光りが入り込んでくる

「ほら、起きて！」

…うるさい

しかも眩しい

そっぴゃ、今日月曜か

また学校か…

「めんどくさあ…」

あくびが出て来る

「ぶふっ！」

右頬にいきなり衝撃を感じる

…どうやら、幼なじみが暴力を振るって来たみたいだ

とてつもなく痛いぞ、ちくしょう

「俺、平手打ちはおかしいと思う」

率直に感想を伸べても

「眠そうだったし」

なんてやつだ…！

…

数分後

自室から幼なじみが出ていくのを待つて、制服に着替える

時刻は7時

携帯を充電器から引っこ抜き、メールを確認する

「…」

37件中37件が出会い系からの言われもない後払い請求だった…！

階段を下りてリビングに行くと妹が朝食の用意を手伝っていた

「おはよ」

簡単に朝の挨拶を試してみるが

「…ん」

なんとも無愛想な返事

「時間無くなるよ、早く食べよ」

幼なじみがテーブルを挟んで向かいの椅子に座る

「あたし、先に行くから」

妹はそう言いながらさっさと出て行ってしまう

「…悪いな」

妹が…沙織が出て行ったのを確認してから言葉を発する

「いいよ、あたしに対しては優しいし」

凜はいつもそういつて笑顔になる…

朝いきなり叩いてきたりするけど…出来た幼なじみだな

「さ、早く食べて学校行こう」

そして凜は笑顔のまま

「はい、あゝん」とか言いながら食べさせようとしてくる

一ヶ月しか歳変わらないのに姉貴面するのはいい加減止めてほしい…

沙織と俺は仲が悪い

まあ、普通の兄妹ならこんなものなのだろうが

けど

ほんの一年前まではこんな関係は考えられなかった

街に買い物に出れば、恋人同士に間違われたり

学校でも仲の良い兄妹で通っていた

何時も一緒に居て

ずっと一緒に過ごして来た

けど…

「一樹、聞ってる?」

稟が俺の顔を覗きこんで来る

「え?...どうした?」

「どうした?...じゃないよ」

稟が不満そうにため息をつく

「急がなくていいの?」

.....

「あ!？」

携帯を見ると8時を過ぎていた

「バカ!なんで早く言わないんだよ!」

「一樹がボーツとしてるからでしょうが!」

怒られた!

...

何時もの場所にはもうあいつがいた

「悪い!遅れた!」

息をきらしながら謝る

「はあ…いいよ、いつもの事だし」

半ば呆れつつ許してくれる

「稟は？」

「先に行った」

まあ実は放つたらかしにして来たわけだが

「放ってきたんだ」

すんごい勢いで睨まれる

「しょうがないだろ」

何故バレたのか、恐ろしい

「開き直るとかサイテー」

「…そんな事言っても梓は俺の事好きなんだろ？」

スカート履いてるのも気にせずものすごい勢いで蹴られる

「さっさと行くよ！」

こいつは…俺の彼女でありながらももう少し可愛いけないのか

っていうより激痛でのたうちまわる人を助ける精神すらないのか…！

…

学校に着き、さっさと上履きに履きかえる

階段を上り、2年3組の教室の扉を開け中に入ろうとしたら

「朝かららぶらぶだなおい！」

いきなり絡まれた

「肩に手をまわすな暑苦しい」

適当に払いのけると

「なんだよ親友」

とか言いながら払いのけた右手を摩りだす透

なんとなくムカツク

「一樹のバカ！」

なんとか教室に入れば次は後ろから衝撃を受ける

「稟か、早かったな」

何事もなかったかのように自分の机に向かう

「放つたらかしにした揚げ句逃げるんだ」

…今とてつもなく馬鹿にされてるな

「…どうしろと」

「昼ご飯！デザート付き」

なんで放ったらかしにしないで俺はこいつに奢らないといけないんだ

「一樹、あたしも」

梓にはなんもやってないはずなんだが

「つか、お前はいつも何かしら俺から奢ってもらおうとしてるが絶対奢らないからな」

「一樹、俺も昼飯…」

「…だからな、梓、俺はお前にも奢ってあげたいんだが…」

「無視!？」

そして昼飯、どうしてかこうしてか結局梓の分まで奢る事に

食券を買いに行くと

「あれ沙織ちゃんじゃねえの？」

透の指差す方には食堂に入って来たばかりか…入口に沙織が居た

「…行かないのか？」

「そう言われてもなあ…」

行っているのか

無視されるのもなかなか辛いからなあ

「…あ」

そんな風に悩んでたら沙織と目が合った

「食券買つくらいなら誰でも出来るから、行つて来いよ」

今はその優しさが辛いよ、透…

食券は透に任せ、沙織の元に行く

「…よう」

「…うん」

…なに言えはいいのやら

「昼飯か？奢ってやろうか？」

少しは兄貴ぶってみるが

「…梓さんに奢ってあげて」

まただ

「…やっぱり梓の事嫌いかな？」

俺と梓が付き合ってからそうだ

「別に…そんなんじゃないよ」

俺がお前に何かしてやろうとすれば梓の名前を出す

「そう思えないから聞いてんだろ…」

「私、友達と約束あるから」

そう行つて沙織は俺から逃げる様にして教室に戻って行く

「…はあ」

なんの為に食堂に来たんだあいつは…

「一樹ー、手伝えー！」

透が料理の乗った四つのトレイと格闘している

あいつは俺を呼ぶまでどうやって四つも持つ気だったんだ…

…

「遅い」

梓が怒っている様子

奢らせておいてなんて奴だ

「いやな、透がちよつとバカやってな」

「いや、どう考えても俺のせいじゃないだろ」

「はい、これ梓のな」

「また無視かよ!」

…やかましい奴だなあ

…

「で、どうだった?」

「また稟が訳の解らない事を言い出しました」

透、俺はお前の説明口調もわけわからないぞ

「で、なんだよ?」

「沙織ちゃん、さっき話してたでしょ?」

なんで入口から一番遠い席に座ってたのに見えてるんだ

「…千里眼か」

透、俺はたまにお前の頭が心配になるよ

「沙織は相変わらずだよ」

ふーん、と分かりきってた感じの様子

「まだ仲悪いの？」梓がそんな事を言い出す

お前が原因かもしれないってのに

…

昼飯後はいつものように授業受けて帰るだけ

「…だっただけだなあ」

誰に言うでもなく呟く

部活の先輩に取っ捕まって練習の真っ最中

剣道部

別にそこまで思い入れもなくほとんど幽霊部員だったわけなんだが
どうしてかこうしてか部長に気に入られていて、毎回見つかつては
連れて行かれる始末

爺ちゃんのせいで剣の稽古なんてもんをしてるもんで、剣道部では
負け無しだったりする

まあそのせいで部長に気に入られてるのもあるんだろう
ってというか学校終わったらバイト行く筈だったんだけど
またクビかなあ…

部長は話し聞いてくれないし…はあ

…

そして部活が終わりバイト先に電話をかけてみれば

「妹さんから話は聞いてるよ」

……………あれ？

結局店長からは次から気をつけるように、と簡単に注意受けるだけですんだ

「沙織ー？」

家に帰り、部屋の外から呼び掛けてみる

「あー…」

靴はあつたし居ると思うんだが

「起きてる…？よな？」

とりあえずノックを試してみる

するとノックが帰って来た

公衆便所か

「今日はありがとな、お前のお陰でクビにならなかったよ」

本当、店長優しい人でよかったよ

「…聞いてるか？」

返事のつもりか扉をノックする

「あー、なんだ…今度バイト代入ったらどうか行かないか？」

今度はノックが帰ってこない

「梓さんと行きなよ」

そんな声が帰って来た

あー…

どうしたもんかなあ…

「…俺は、お前と行きたいんだよ」

沙織の部屋からは物音一つ聞こえない

「なあ、沙織……？」

……すごく長い間があいて……

小さく……ノックが返って来た

プロローグ1（後書き）

ども、初めましてレンコン畑と申します　まあただのレンコン畑でそれ以上でもそれ以下でもないのであまり気にしない方で　初書きなのかどうかはわかりませんが面白いのかどうかは自分ではあまりわからないもんですな　色々面白いと思われる話を読んだりしてますが吸収できてるのかどうか　まあ吸収できてないんでしょうが（笑）　ただのレンコン畑の自己満足小説なんで暇潰し程度にでも読んでもらえたらまあ幸いです、はい

プロローグ2（前書き）

主人公の一樹の両親ですが母は小さい頃に交通事故で亡くなっていて、親父は仕事で海外に行ったりしますので必然的に家には妹と二人です

プロローグ2

妹の沙織は目の前に座っている

が、無口

この間、遊びに誘って一応OK（俺が勝手に思ってるだけかもしれないが）もらったわけなんだが

今だに何処に行くかも決まってるじゃないし、あれ以来まともに喋ってない

っていうか二人きりのこの状況は辛い

時刻は12時ちょっと過ぎ

今日は日曜で部活のある稟は家に来ないし…

どうしたらいいのかね

「…ねえ」

珍しく沙織から話かけてくる

「…どした？」

軽くびびって変な間が空いてしまった

「この前の話しなんだけど…」

…こいつも考えてたのか

「沙織」

「…なに？」

「バイト代、明後日に入る」

「う、うん…？」

「どっか行かないか？」

よし、言った！今俺すげえかつこいいぞ！

「…梓さんは？」

…こいつもなんというか、この返答が板についてきたもんだな

「あー大丈夫、あいつはあいつで忙しいし」

「…わかった」

よし！

心の中でガッツポーズ

「で、どこ行きたい？」

「別に…どこでも」

…反しに困る返答しやがって

「あんま遠い所もなあ」

「ここらへんは…」

海…くらいか

冬一步手前の今行くべきじゃないよなあ

「…ホントに行きたい場所ないのか？」

少し悩んだそぶりを見せ

「海…？」

「…さすが俺の妹」

キョトンとした表情を見せたと思えばまた無表情に戻る

「…っていつかその話じゃないんだけど…やっぱり覚えてないんだね…」

「…どした？」

「別に」

…兄ちゃんそついつシンデレレはどづかと思つてよ

……

結局行く場所は決まらずまた無言に

重力が一気に重くなった気がする

「部屋、戻るね」

そう言って立ち上がる

「あー待て待て」

一応立ち止まってくれるがこっちを向こうとしない

「行きたいとこ決まったら言えよ、連れて行ってやるから」

「ん」

軽く頷いて、部屋に戻っていく

「はあ」

どうしたらいいかね

……

部屋に戻ってみると携帯に着信が入っていた

「梓か」

かけ直すのもめんどくさいしなあ

ま、どうせ明日学校で会えるし

…寝ようか

次はここから、また始まるんだね

もう何回目だろう

あなたが現れてから

この悪夢が始まったの

今度こそ…死なせないから…だから、お願い…！

プロローグ2（後書き）

とりあえずつまらない（え）プロローグはこれで終わりです、次はほんとにいきなりですがみんな大好き異世界に送られます

常闇の始まり（前書き）

中二臭いタイトルなこと

常闇の始まり

誰でも睡眠中に夢は見た事はあるだろう

夢なんてものは覚えていることがあったり所々記憶してなかったりとかかなり曖昧なモノだ

そんな夢だが、夢の存在意義は二つの説がある

一つは

「無意味な情報を捨て去る際に知覚される現象」

一つは

「必要な情報を忘れないようにする活動の際に知覚される現象」

と、二つはまったく逆の説なわけなんだが

だとすると

「今の俺の状況はどっちだ」

目覚めと同時に朝日を感じ、目をあけてみれば何故か外で寝ている状況

もしかして沙織がやったのか？とかありもしない事も思ったがまったく見覚えのない森の様なところで寝てたのでそれは無いと思う
なにより

俺は今、何故か女の子に追い掛けられている

自慢じゃないが俺は女の子に追い掛けられる程モテるわけない

それに一目で俺に対して好意を持つてるわけじゃないのがわかる

左手に持つてる刀がそれを表している

「銃刀法はどうしたよ、ちくしょう」

つか夢だろこれ、夢であってくれよ

出会った瞬間切り掛かれて右腕を軽く切られたせいで地味に痛いんだが

「誰だよ夢なら痛くないとか行つた奴は！」

最悪の展開で最悪の状況、軽くパニックに陥つたせいで叫んでしまつた

そしてこれが失敗だつた

「動くな」

おいおいおい背中に軽く刃の先が刺さつてるぞ、ちくしょう

「お前、何者だ」

その前にその刀なんとかしてくれないかな、まちで

「聞いてるのか？」

「あ、あんななんだよ？」

「…？」

いきなり背中に軽く刺さっていた刀を下ろされる

「お前には私の言葉が通じているのか？」

振り向けば、そこにはなんとわかりやすく可愛い子が居た

「…両手を上げろ」

言われた通りに両手を上げる

「…何処から来た？」

「…何処からと言われても俺は…」

「もういい、わかった」

いきなり言葉を遮られる

「男なのか…そんなはずは…」

ぶつぶつと一人言を喋り始める

「よし」

そして一人で納得した様子

「お前、私に着いて来い」なんという身勝手な、いくら夢だからってこれはどうなん…

スツと

刃が喉元に当てられる

夢であってくれ、頼むから…

……………

着いた所は中世の雰囲気醸し出した場所

さすが夢だ、RPGの中に迷い込んだみたいだ

遠くの方にとてつもなくデカイ城が見える

さながらここは城下街

露店が並び、屋台では串にささった肉が焼かれていて匂いだけで腹が減ってくる

「こつちだ」

そんな中、この女はどんどん進んで行く

「なあ、あんた名前なんて言っただ？」

意思の疎通を試みる

が

「すまない、答えてやりたいが私はお前の言っている事がわからないんだ」

とんでもない事を言われた

…どうりでさっきから話しかけても無視されてるわけだ

…せめて名前だけでも伝わらんか

「あ」言葉の通じない人間に、なんとかして伝える方法があると親父に教わっていたのを思い出す

そしてそれを試みようとして肩を叩く

「どうした？」

女は振り向く

そして俺は

「一樹！」

自分をおもいつき指差し叫ぶ

人間なんてものは、動きが伝わればたいてい相手に意思が伝わる

親父が何故かよく言ってた

とりあえず今はその言葉を信じてなんとか伝えようとする

「…カズキ？」

アネットが呟くと俺は力強く頷く

「そうか…カズキか、お前の名だな？」

もう一度、頷く

「そういえば自己紹介がまだだったものな…私は、アネットだアネット・フリジア」

聞いた事ある名前のような無いような…小説かなにかのキャラクタ
ーだったか…？

まあ夢なんだし、記憶が夢に反映されるなんてよくある事だもんな

………

そうしてアネットに案内（というか無理矢理）連れて来られた場所

そこはさつき遠くから見て居た城だった

「少し待ってろ」

そう言うのアネットは城門をぐぐり抜け中に入っていく

「…はあ」

一人になるといきなり不安になる

知らない所に置いて行かれるのはあんまりいい気分じゃない

そして一人になると色々疑問を抱く

なぜかアネットには俺の言葉が伝わらない

そして、アネットの言葉は俺に伝わっている

だが

口の動きが確実に違う

日本語なんてのは

「あいうえお」の五文字が基本の口の動きだ

だけど、アネットの動きはまったく違う

これが一つめの疑問

二つ目は

これは本当に夢なのか

信じたくもないが確実に体感が夢とは思えない

確実に夢だ、と言い切れないのは

匂いのせいだ

さつき屋台から感じた匂い、普通に肉を焼いた香ばしい匂いだ
った

問題は、これが夢だとしたら匂いを感じるのはどうなのだろう

個人的には夢で香りを感じた事がない

そしてもう一つ

痛みだ

色々あつて忘れてたがアネットに腕を切られている、そのせいで今
でも軽く痛みがある

いい加減治療して欲しいんだが

この痛みのせいで、夢とは思えなくなっている

そして最後の疑問なんだが

さつきから耳鳴りが酷い

城の前に来てからいきなり耳鳴りがした

こればかりはどうしようもないが、これはちょっと酷い

頭に少し響くくらいと言えいいのか

なかなか強烈な耳鳴りだ

あー、いつまで待ってればいいのかなあ

.....

そして数分後

アネットに治療室に連れて来てもらう

医者に俺の傷の手当てをしてもらうらしいんだが

「おう！よく来たなひよっこ」

これはどうしたことが、俺は頭がイかれてしまったようだ

目の前にいるのは、少し青みがかった髪をツインテールに束ね、白のワイシャツ黒のスカート、そして白衣を纏ったなんとも色っぽいというかそれらしい格好をした医者だ

医者のはずなんだ

なんだこの低身長は

中学生…いや、下手したら小学生で通る身長

そしてこのロリボイス

何歳なんだ…

「ほれ、そこに座れ」

ちびに言われるがまま椅子に座る

「なんだよこの傷はー、治し甲斐がねーなー」

そのまま腕の傷をばしばし叩かれる

すっげえ痛い

「よっ」

ばしばし叩いていたが、真面目な顔になるとそのまま傷口に手を当て、軽く力を入れられる

「あつつう!？」

え?なにこれ?

力を込められた手からとてつもない熱さを感じ飛びのいてしまう

「あー間違えちった」

なにこの子？ちょっとした間違いで俺の腕ミディアムにしようとしたよ、怖い

「フィア、遊んでないでちゃんとやれ」

アネットがちびに声をかける

「あーい」返事をする俺に手招きをする

「そんな怖がるなってー、さっきのはちょっとした遊びだって、だからこつちおいで」

笑顔でそんな事を言われる

小一時間問い詰めてやりたいが、言われるがままに近くに行く

「力抜けよ」

また傷口に手を添える

「痛い痛い飛んでけー」

いい加減殺意が芽生えそうだ…

とか思っていたら

「…んなアホな」

しっかり傷口が治っている

これ…なに？

夢だから？

だめだ、わけわかんね

「今度はちゃんとした傷作れよー」

なんとも恐ろしい事を言われる

………

城の中はなんとも華やかなんだろうなー

とか思っていたが意外とそうでもない

まあ廊下に赤い絨毯敷かれていたりして一応華やかっちゃ華やかなんだが

期待し過ぎたか

というか、そんな城内より気になってしょうがない事がある

まず俺はこんな所になんで連れてこられたのか

それともう一つ

さっきからすれ違う人ほとんどが俺を見ている

かなり感じが悪い

……

「あんまり失礼の無いようにな」

言葉通じない分ほとんど失礼な事なんか無いと思うんだが

っていうかもしかして

「姫は居るか？」

扉の前に立っている兵士っぽい人に聞いてらっしゃるんですが

いきなり王族と会わせられるのか、俺

そして兵士の答えはイエス

「カズキ、お前はそこで少し待ってる」

そう言うと、アネットは扉の奥に入っていく

ちらっと中が見えたが、謁見する場所っぽかった

マジで会わせられるのか…？

「…」

とてつもない視線を感じるんだが

言葉通じないらしいし、交流図ろつにもいきなりジェスチャーしだ

しちゃ危ない人だよなあ

そんな事を考えていると、数分しか経っていないのに早くも扉からアネットが戻ってきた

「来い」

扉を開け中に入る

赤い絨毯の先

なんともでかい椅子があり、座っている少女がいる

「……」

目を凝らす

赤と白で彩られた色彩のドレスを着て、肌は白く髪は赤みがかつた黒

俺はこいつを知っている

「……お帰り」

そう、この声だ

こいつも俺を知っている

なんでここにいる？

なんでそんなところにいる？

そうだ、こいつは夢だ

さすが夢だ、こいつがこんな笑顔見せるなんて

「どうしたの？」

ああ、そうか、返事しないとな

「なんでもないよ……沙織」

常闇の始まり（後書き）

一応ここから本編です。序盤は現代で過ごし異世界に送られるとかいうありがちな展開ですね、はい。大阪に住んだりしてトンフルの影響が心配なレンコンでした まる

異世界ファンタジア（前書き）

変な改行になったりして編集、閲覧、編集、閲覧を繰り返してみた
りするが改行すればする程また変な改行になる罍

異世界ファンタジア

なんと言えいいのか

まったく状況が掴めない

これは夢の筈だ

だが、目の前にいる少女は俺の悩みとは裏腹に笑顔を絶やさない

「アネット、彼と二人で話したいの…いい？」

「ハッ」と言うとアネットは扉の先に行ってしまう

…さて

これで、俺と姫の二人になったわけなんだが

「どういう事かねワトソンくん？」

「私ワトソンじゃないし」

苦笑しながらもちゃんと返答してくれる

昔に戻った様だ、ちゃんと話が出来ている

「沙織だよな？」

「うん」

あっさりと謎が解ける

「これは夢か？」

「夢…うん、まあ夢みたいなものかな」

こっちもなぜかあっさり

「どっいつ事だ」

「どうもどうも…」

この質問はあっさり行かない様子

「そうだ、小説とかよく読むよね？」

「ラノベ読者を舐めるな」

数々のラノベを積んだままだが

「まあ、大体予想はついてると思うけど…ここは異世界、ファンタジーって所なの」

なんとも貫禄ある名前だ

「それでまあ、私はファンタジーに存在するエピソードという王国の姫なんだけど…」

「待て待て待て待て待て」

「呪文？」

何故そうなる

「生憎、俺はそんな力持ってない」

「…素質はあるのに…」

「なんか言ったか？」

「気にしないで…で、どしたの？」

どうしたもこうしたも、こいつはボケをかましてるのか

「俺の妹がなんで姫様なんかやってんだよ」

「…乙女秘密」

「絶対ごまかされてやらねえ」

酷いなあ、とか言われたがかなり重大な事だ

「そうだなあ…まあ簡単に言えば私が姫で妹だからかな」

まったくもって簡単じゃないし全然解決してねえ

「お前説明する気あんのかよ…」

「ごめん、多分これは兄さんが気付くべきことだから」まったくわ

からんが久しぶりに兄さんと呼んでもらえた

もうなんかそれだけでいいかな、とか思ったりする辺り俺小物

「話す気はないのか？」

うーん、と考えている様子

「じゃ、ヒントあげる」

いや、答えくれよ

「兄さんは、私に会うの初めてじゃないよ」

…まったくヒントじゃない気がするんだが

つか、そりゃ毎日会ってるだろうよ…

毎日…？

「…沙織がここに居るって事は、向こうにも戻れるんだよね？」

軽く聞いたつもりだったが

「ごめん、無理なんだ」

沙織の答えはそれだった

「…なんで？」

当然の疑問なわけなんだが

「ごめん…無理なんだ」

やはり答えは変わらない

「お前はどうかやってこっちに來てた？」

「それは…」

沙織が顔を伏せて、沈黙が訪れる

「…？」

さつきから少し氣になってたんだが…静かになって核心した…外が騒がしい

「姫！」扉が開かれ、中に入って來たのはアネットだった

「なにかあった？」

「すみません、敵が城内に侵入したようです」

…敵？

「わかった…アネット、少し任せていい？」

「了解です」

アネットは返事と共に、走り去って行った

「兄さん、ちょっと来て」

沙織が椅子から立ち上がる

「…？」

………

椅子の後ろの壁には扉があり、奥には通路が続いて居た

「さ、行こう」

先に進む沙織を追いつつ奥に進んで行く

そして通路を抜けた先には、また扉があった

「よいしょっ」

「姫様がその掛け声はどうなんだ」

「兄さんは何も聞いてない」

おいおい…

「ほら、行くよ」

「あいよ」

………

扉を抜けた先は外だった

森の中に石畳が敷き詰められていて、一つの道が出来ている

その上を通り抜ける

「…なあ」

「なに？」あまりにも自然だから忘れてたんだが

「お前なんで怒ってないの？」

元の世界じゃあんだだけ険悪だったにも関わらず、そんな事も無かったかのように接している

「…別に怒ってたわけじゃないよ」

「…じゃあなんで？」

うーん、と何か考えこんでらっしゃる

「兄さんが、私の所に来たから」

「…お前、説明不足って言葉知ってるか？」

「それくらい知ってるよー」

と笑顔で言われる

何故か逆に俺が馬鹿にされてる気がするぞ、これ

「説明不足になるのはしょうがないの」

自分でわかってんのかよ

「でも、大丈夫…兄さんは私が守るから」

「…？」

こつちの世界来てからこいつの言ってる事がたまにわからなくなる

………

開けた所に出た

「エイミー、どこー？」

どなたか呼んでらっしゃる模様

ん…エイミー？

はて…何処かで聞いた事ある気がしないでもない…んだが…？

「エイミ、おいで」

知らぬ間にそんな事を口走っていた

「主か…?!」

森の奥の方から声が聞こえて来た

「主……！」

「うわ！？」

一瞬影が見えたと思ったら俺の胸の中に何かが飛び込んで来た！

「……待って居たぞ」

「え？え？」

白い……いや、銀色の髪をした少女が胸の中で居た

「さ、沙織……どゆこと？」

「うーん、なんというか……」

「主……！」

少女は俺を見つめている

主って俺ですか、ねえ？

「どうした？」

上目遣いで見つめられる

「いや、なんにも……」

「よかった…今度はこっちだったんだな…！」

…？

今度とか、こっちとか…なんのことだ？

「エイミ、ちょっとだけ兄さんの事任せれる？」

「…主を守るのは私の仕事だ、任せろ」

「いや、任せろつて、ちょ、え？沙織！？」

沙織は急いで今来た道に戻って行った

「えー…」

やばい、またなんか置いて行かれた

「主はいまさつき来たばかりなのか？」

「っ…ああ」

沙織の前だから多少は強がってたが、ここに来てからさっきの耳鳴りが酷くなっている

頭が軽く割れそう…

「主、大丈夫か…？」

「た、多分…」

あーやべえ、頭痛え

さすがに辛くなってきたので座り込む

「主……」

「お、おい……」頭を抱き抱えられる

「ちょ……!」

「動くな」

どう見ても年下の子なのに圧倒されてしまう

「主、私を見る」

「ん……?」

顔をあげるとエイミの瞳の色が青から赤に変わっていた

「っ……!」

頭の中に、なにか侵食してくる

「主、あなたの運命は変わらない」

「ハア……!?!」

瞳は血の様に赤く、中心が濁っているように見える

「主は、神を信じるか？」

「どういうことだ…？」耳鳴りは酷くなり、思考するのが難しくなってきた

「気付いて」

一際大きな声が頭の中に響いて来た

「主、今この瞬間に全ての答えを伝えた所であなたの運命は変わらない、そればかりか悲観する筈…私はそんなあなたを”見た”」

俺が…？

「今回もどうなるかわからない、だけど」

エイミの赤い瞳に涙が溜まってる

「こっちに来た限り、私は全力で主を守る」赤い光が、エイミを包む

「っ…！？」

頭がッ…！！

”大丈夫”

「な…んだ…！？」

”——大丈夫”

「エイミ…?」

…途端に耳鳴りが止む

「…なんだっただ…?!」

目の前の、エイミが居た場所には長身の刀が落ちて居た

「あんだ…これ?」

拾い上げて見る

”よかった、壊れなかった”

「おうわ!?!」

いきなり刀から声が発せられる、驚き手を離す

”あ痛ッ”

光が刀を包むと…

「いきなり手を離すな…痛いだろうが!」

エイミが尻餅をついた格好でいた

「…なにこれ」

もしかしてさ、これって

ラノベとかでよくあるやつ？

「さっきの刀…エイミだったのか？」

「…まあな」

ほら、やっぱり

「どうなって…」

「伏せろ！」

「おうわっ！？」エイミにいきなり飛び掛かれその場に倒れ込む

「いつつ…」

起き上がるうとするが

「伏せてろ」

頭を押さえられる

「な、んだよ…っ」

「姫の奴、逃がしたっばいぞ」

「なんの事だよ？」

「…主、走れるか？」

また質問無視ですか

「くそつ、走ればいいんだろ走れば」

なかばヤケになつてゐる俺

「あそこ、見えるか？」

エイミが指差す先

「全部木しか見えん」

「あー…そうだったな…眼が悪いんだったな」

…なんでこいつ知ってた…？

「とりあえず、さっき指差した方と逆に走る、いいな」

「わーった」

まったく何がなんだかわかってないが

そして、ゆっくり立ち上がる

「ま、待て！」

「は？」

ズツ…と、足に何か刺さった

「なっ…」

足の力が抜け、片膝を着いてしまう

「主！」

エイミが、涙を浮かべている

「くそっ…」

足に矢が突き刺さっていた

なんだこれ、感覚無くなつて来たぞ

「毒が塗られてたみたいだ、多分痺れるだけだが一時間くらい動けないと思う」

「んだよ、それ…」

だんだんこの状況の理不尽さに苛立って来た

そんな考えをしていたら、ゆっくり影が近づいて来た

「カズキ…待ってた」

黒いコートの様な物を羽織った金髪の子が居た

「お前…」

何故か

見覚えがある

「は、あ」

考え様にも足に突き刺さったままのこいつのせいでまともに考えられねえ

「主は、私が守る」

エイミが、俺の目の前に立つ女との間に割って入る

「こいつをぶん殴ってすぐに手当てするからな」

もしかしてエイミって…怖い子？

「言っておくけど、私はカズキに会いに來ただけ」

「会いに來ただけなのになんで矢なんかが俺の足に刺さってんだよ…」

「久しぶり」

また俺の発言は無視

のくせに笑顔で挨拶してくる

「私が」

笑顔を崩さない

「カズキを殺してあげるから」

そのまま弓を構えだす

「お前、あんまり調子に乗ってると灰にするぞ」

もうだめですエイミは怖い子です

「はあ」

金髪の子は弓を下ろす

「その娘、まだそんな怖いんだ」

エイミの事を知っている様なくちぶり

「もういいや…また来るね、カズキ」

とんつ、とジャンプし木の枝に飛び乗る

「またね」

そして、次に飛び上がった時には姿が見えなくなった

「…くそ」

エイミさんは少し怒っているみたいです

「主、傷を治そう…城の中には医者がいるだろう？」

「そ、うだな…はぐっ」

あーダメだ、痺れてて感覚無いや…

「…足は痛むか？」

「そうでもないよ」

正直痛みには慣れてるし

「すぐに誰か来るだろうが…治療はすぐした方がいいな」

首と腰の下に手を入れる

「うそだろ」

ひょいっと持ち上げられる…わかりやすく言えば、お姫様抱っこされてる状態だ

「さ、行こう」

軽々と抱き抱えられてる辺り余計に恥ずかしい

「主」

真顔で見つめられてしまう

「守れなくて、すまなかった」

なんというか、こいつも律義というか

「俺が勝手に動いたからこうなったんだ、エイミは何も悪くない」

「…」

何故か驚いた様子

「ヘタレの癖に、よく言う」

酷い言われようだ

「主」

「…なんだ？」

「約束、守れなかった」

約束…？

「すまなかった」

…？

エイミは自己完結したっばく、そのまま黙りこんでしまった…

「…」

っというか

女の子にお姫様抱っこされるとか

なんて恥ずかしい格好なんだろうか

異世界ファンタジア（後書き）

誤字脱字を見逃す事が多いという
↑

剣と魔法（前書き）

新しい携帯の使い方がわからない

剣と魔法

「またしょうもない傷作りやがって」

フィア（医者）の治療が進む

「綺麗に刺さり過ぎて治し甲斐がほんとないな」

矢を抜き、フィアが俺の足に軽く触れる

「はい、終わり」

一瞬傷の部分が疼き、フィアが手を離すと綺麗に傷は塞がっていた

「お前なにやったらこんな綺麗な傷が出来るんだよ」

「なにやったらと言われてもな…」

……………「兄さん、大丈夫？」

心配した表情で治療室から出た俺に沙織が声をかけてくれる

「だいじょぶ、だいじょぶ」

「…ごめんね」

「なにがよ？」

「私のせいで…ケガして」

「…ようわからんが、お前のせいでは無いと思つぞ」

どうしてエイミも沙織も自分のせいだとか言ふのだろうか

「兄さん、さ…これからどうする？」

「…どうすると言われても」

なんにも考えてない…っ！か考える暇が無かつた

「兄さんさえよければ…ここに居て欲しいんだけど」

「ここって…この城？」

こくりと頷く沙織

「…いいのか、俺？」

「うん」

「じゃあ…そうさせてもらつけど……」

「よし、ちゃんと聞いたぞ」

「うわっ！？」

真後ろにアネットが立っていた

「アネット、彼の事よろしく」

「はい、姫様」

そうして

首根っこ掴まれたまま、連れて行かれる

絶対なんか嫌な事になるのがわかるのは気のせいかな？

………

城の一角にある部屋が俺の部屋になるらしい

「中は好きに使っていいぞ」

「なんで俺が好きに使う前にエイミが俺の部屋を好きに使ってんだ？」

俺のベッドになるはずの場所でくつろいでらっしゃる

「一緒に、使ってくれ」

…なんでだ？

「一緒に使うつってもな…」

「お前が変な気を起こさなければいいだけだ」

なんとも簡単に言ってくれるな

…ん？

「アネットって、なんで剣とか持ってたんの？」

「なぜと言われてもな…姫を守る為だが…」

やっぱり

「なあ」

「ん？」

「なんで話通じてんの？」

「…今気付いたのか？」

おーっと冷めた目線

「はあ…」

なんとため息

「で…なんで？」

そうだな…とうつぶいってしまう

「…私の力だ」

今までなんの発言もしなかったエイミが口を挟む

「どゆこと？」

「私が一樹を選んだからだ」

「…？」

ようわからん

「さっき、私を手を取っただろ？」

「…あー？」

エイミが刀になった時か

「あれは私が望んでお前の前であの姿になった」

「…そうなのか？」

アネットに聞いてみる

「私もエイミには会った事ある、が、人前で刀になることは無かった」

「ふーん…」

それで?とエイミに聞く

「私は、お前の様な違う世界から来た人間をこの世界に順応させる力がある…どこから来るともわからないからな、会話もできない、環境も悪いじゃ生きて行くのも辛いだろう」

「…なんで刀になる必要があつたんだ?」

「そこだ」

「なにが?」

「力を手に入れたんだ、カズキは」

「言葉通じてるのになんでこうも意思が通じないんだ…!」

「どうした?」

「いや…あー、でなんだっけ?力だっけ?」

そうだ、とエイミは頷く

「なんでまた…つかなんの力だよ」

「姫を守る力だ」

「……はあ?」

わけがわからなくなってきた

「違う世界の人間はそれだけで潜在能力が高い」

「…そうなのか？」

「さっき治療しただろ？」

あー…ファイアのやつか

「あれは潜在能力の一つだ…この世界の人間は自分の持つ潜在能力を好きに操る事ができる」

「はあ…」

「わかってないな…」

「いきなり潜在能力とか言われてもな…」

前はもつと理解力あつただろ…と言われる

「そうだな…お前、テレビゲーム好きなんだし魔法はわかるよな？」

「そりゃまあ…」

「潜在能力なんて言わば魔法だ、使えるやつだけ使えるようになる…まあ実際使える奴なんてお前の世界には居ないだろ」

それもそうだろ…んな力使えたらマスコミ殺到だろうし

「私がお前に与えた力はそういう力だ」

「…じゃあ俺魔法使えるの？」

「訓練すればな」

「…それで？姫を守るってのは？」

「その潜在能力、別の世界の人間の方が開花が早い…それに、この世界の人間より高い力を得る事が多いんだ」

「なんでそんな事わかるんだよ？」

「昔からそうだったからだ」

即答ですかい

「で、そんな力持ったから俺が姫を守るの？」

「ああ」

「じゃあなにか、沙織のやつ知ってここに置くつつったのか？」

「それもあるだろうが…お前がここに居ないと守れないからだろ」

「守れないって…？」

「お前、まだ力の開花もしてないだろ？…そんなやつが外でうろついて、ましてや私が力を与えてるやつだ…開花する前に誰に狙われ

るともわからんだろ」

…なにそれ

「俺って狙われてんの？」

「だから、そんな傷が出来たんだろ？」

さっきまで矢が刺さっていた足

「…最悪だ」

「その為に、私が居る」

何故かやる気まんまんなアネット

「どゆこと？」

「弱いままじゃいけない、なら、鍛練だ」

「アネットが？」

「お前がだ」

あー…

「アネットに、鍛えられるの？」

「まあ、そういう事だ」

はあ…

「そういうわけだ、明日から訓練始めるからな」

「明日かよ!？」

「早い方がいいだろ? ゆっくり休めよ」

小さく微笑んで、部屋から出ていくアネット

…まぢかよ

「あと、一つ言っておくが」

エイミが口を開く

「あいつの訓練厳しいらしいぞ」

どうでもいいことだった

…

こうして、剣と魔法（潜在能力？）の存在する変な世界での生活が始まった

剣と魔法（後書き）

前の話からかなり間が空いてしまった、忙しいからしょうがない（言い訳）

始まり（前書き）

久しぶりの投稿

始まり

この世界に来て1週間

「うわ！」

目の前を木刀が掠める

「飛んで下がるな！一歩だけ引いてすぐに打ち込んで来い！」

朝から稽古

アネットはやる気あり過ぎて怖い

この1週間の間に街で三回も変な奴に狙われた

毎回アネットが着いてくれるからなんとかなっではいるんだが…

つかアネットが親切で街を案内してくれてる時に限って狙われているのが幸いか

…幸いなのか…？

「お前、剣の扱いが独特だな…その割りには基本が出来てる…我流なのか？」

「あー…まあ、一応な」

どうやらアネットの剣の扱いは居合いみたいで、毎回鞘に戻すかの

様な動作をする

毎回剣筋が読めないから眼前でちゃんと構え受け流す様にするか避けるかしないとどうにもキツイ

打ち返そうにも俺が前に出ようとする頃には構えに戻って行って、すぐに弾かれてしまう

そんなわけで

「どうやって打ち込めっつの…」

「お前なら出来るだろ？」

なんて簡単に言われてしまう

つつても…動作が速すぎて追い付けないってのがあるしな

下手に突っ込んで痛い思い（今までで三回）するのも嫌だしな―

強いなあ、こいつ

「…!!」

木刀を凄いい勢いで弾かれ、手が痺れる

「あー痛い痛い、タイム、終了!」

その場でへたりこんでしまう

「お前なあ…根性あるのか無いのかどっちなんだ…？」

うわー

「ほら、大丈夫か？」

そう言いながら、手を差し出してくれる

「ああ」

その手を受け取り立ち上がる

「さ、行くぞ」

……………へ？

その後もみっちり打ち合い

「今日はここまで、だな」

アネットのお許し

「はあ、やっと終わった」

その場で座り込む

毎回こんなんだな

「明日は街に出るぞ、エイミにも言っておけ」

「あゝい」

「はあ……」

やってしまった

「どこっすかここ？」

アネットとはぐれてしまった

「どうするんだ一樹」

「……」

元はと言えばこのチビことエイミが屋台の匂いに釣られて、色んなところにふらふら行くせいでこんな事になったわけで

「アネット探そうにもこっちに来るのは初めてだしなあ」

このエピオラってところは東西南北のエリアに分けられて居て更にそ

これから4つのエリアに分割される

で、今は南のエリアに来てるわけなんだが

「どの位置なのかいまいちわかんねーな」

「なあ、アネットが何処に居るかもわからないし城に戻った方がよくないか？」

エイミさんあなたのせいでこんな事になったんですよ

「つかそんな事したらまた俺が怒られるだろ！」

アネットからはぐれたのは今回で二回目

一度目もエイミのせいなんだが

「…一樹」

「今度はなんだよ…また食い物か？」

「敵が居る」

…あー

「最悪だ」

はぐれた時に限ってこうなる

「向こうには見つかっているが、幸いここはまだ人通りも多い」

南のエリアは特に活気があり、海が近くにあるせいか海産物等はこのエリアでしか売ってないものも多い、船の停泊場もあり外からの輸入品や観光客なども居るので他のエリアよりは人が密集しやすい。だが、その土地柄のせいで他国からの密入国や内部への侵入もさ
れやすいエリアでもある

「このまま逃げ切るのは難しいか」

「どうすんだよ、アネットも居ないしさ」

「…ここらで実戦も必要だろ」

さらっと嫌な事を言われる

俺の嫌そうな顔を見たエイミは

「男だろ、やる時はやった方がいい…お前はそんな奴だろ？」

…こついう時だけこいつは可愛い

「ってか、戦うって言ったってどうすんだよ、こんな人通り多い所
で」

「人が少ない場所はこの近くに無いのか？」

「俺こつちに初めて来たからわかんねー」

使えんな、とか聞こえたが気にしない

「…そうだ」

エイミが何かを閃いたようで

「行くぞ」

さっさと歩きだす

で、着いた場所は

「海！」

蔑む様な目で俺を見るエイミ

「なんでだよ！海来たらテンション上がるだろ！」

「状況わかって言ってるのか…？」

もうやだ…

エイミに着いて砂浜を歩いていく

「ここら辺も結構人いるもんだな」

「観光客が多いからだろうな…ちっ」

多分エイミの考えでは海に人が居ないもんだと思ってたんだろうなー

「しょうがない…、一樹、耳貸せ」

「ちゃんと返せよお?」

額にこんなマークを浮かべる

←

#

「はあ…」

怒られるのも嫌なのでエイミの身長に合わせてしゃがむ

「……なに?それやるの?」

「人を散らかすならそれが一番だろ、上手くいけばアネットも来てくれる」

…結構恥ずかしいじゃねえか

「ほら、早くしろ」

エイミが光に包まれ剣の姿に変わる

「…はあ」

わざわざやらかすのも本意じゃないんだが…

エイミを手に取り、後ろに振り返る

「王国騎士ファントムだ！民間人はすぐに立ち去れ！！」

…恥ずかしい！

「…」

うおい！

「エイミ！みんなして蔑んだ目してるぞ！」

「お前はバカか！アネットから貰った腕章があるだろ！」

どうでもいいが剣が喋るって結構グロいかも…

「えーと…これが」

ポケットから取出し、腕に着ける

それでやっと皆わかってくれた様子

「ああああ恥かいたああああ」

「お前は緊張感ないのか！」

「まったくだ」

エイミの声に続いて、違う声が聞こえる

振り替えると、そこに

「久しぶりだな」

また俺の事を知っているっぽい奴がいた

「時が進む事もなく毎回こんな事繰り返してなんになるんだってのな？」

なに言ってるんだ、こいつ

「ま、いいか…」

真っ赤な瞳で睨まれる

男か女かわからない中性的な顔立ちが

「逆にアリだ」

「なにがだ？」

「エイミは知らない方がいい」

「どうせまたつまらない事なんだろ」と凶星

なんて洞察力

「あー、悪いけど今日は偵察だから」

いきなり拍子抜け

「今までちょこちょこ偵察向かわせてたが、誰も帰って来ないし…
気になって私が出てきた訳だ」

アネットが全員倒して（手刀）城の牢に捕えたからだなあ…

「元気そうでよかったよ、じゃあな」

何故かそんな言葉をかけられ、男女は去っていく

「なんだったんだよあれ？」

「私は知らん」

…ほんとに、なんだったんだ

人を退避（結局無駄だったが）させたりしたせいで、少し大事にな
っていたよう

「こんな所に居たのか！」

アネットとやっと出会えた

「急ぐぞ」

「…へ、ということ？」

「城が狙われた」

「さっきの奴か…？」

「お前、やっぱりまた狙われたのか」

何故か頭を抱えるアネット

「はあ…時間が惜しい、私は行くぞ」

「ちょ、待てって！」

始まり（後書き）

いろいろ忙しいです、自己満なんでだらだら更新

遭遇（前書き）

色んな意味で遭遇、あと後半はかなり個人的な趣味に走つとります
∴ まあ自己満小説だし（ry

遭遇

「王国騎士？」

城に住む代わりに一つの条件を出された

それは…

沙織と、この国を守る王国騎士——通称ファントムに所属する事

「嫌？」

沙織に言われて嫌なわけないんだが…

「なんで王国騎士？」

「アネットが、人手不足だって言ってたから」

あんな鬼みたいな奴の下で働くってなったらそりゃ人手不足になる
わな…

「なんだ、その顔は」

アネットに睨まれる

「別にいいで、入るだけでいいのか？」

「まあ…当分はね」

というわけで、俺はファントムに加入する事となり

ただいま急ぐアネットの遥か後方

さすがに鍛え方が違うのかアネットの早さが尋常じゃない

「はあ…はあ——！」

「置いていかれてるぞ、主」

「わーってるよ！あいつが早すぎるんだ！」

最早アネットの姿が見えん

「沙織が狙われてるかもしれないぞ？」

「だー！もう！！わかってるよ！」

疲れも無視して走る…！

「はあはあ…！」

城門前に着き、王国騎士の腕章を着ける

「よし」

内部へと進む

……

見た目としては派手な損壊は無い… かと思えば、一ヶ所でかい穴が空いている

「この下って、牢屋だっけ？」

「そうだ… 多分仲間の救出だろうな」

仲間の救出… ねえ

「主、急いだ方がいい」

「…？」

そついう事なので急ぐ

……

地下牢に下りると、アネット… 王国騎士の面子が血に塗れていた

「なんだよ… これ?!」

腕が転がっていた、足が転がっていた、胴体が転がっていた、頭が転がっていた、血肉を撒き散らして壁や天井に着いている

「…！」

その事に気付き、瞬間的に自分の悪寒が膨れ上がって

吐いた

「一樹…」

エイミの悲しみを込めた声が聞こえる

何がどうなってるのかわからない、人がどうかすらもわからない
状態でソレはある

「ん…？なんだ、お前か」

海で会ったあの男女が、アネット達の前に立っていた

男女の手には血に濡れた黒い剣がある

「一樹」

こんな時にんだがエイミの奴、怒ってる時や不満な時…敵が現れた時…か…？

そういう場合には俺の事をわざわざ主から一樹と言い換える…
なにかの癖なのか

「一樹、しっかりしろ」

「わかってるよ…んなこと！」

エイミを構える

「やるのか？」

男女は笑っている

「一樹…逃げろ!!」

アネットが叫んだ

その瞬間には、もう目の前に男女が立っていた

「なあ、覚えてるか…俺の事？」

「…なんで俺が！」

エイミを振るう

それを男女は後ろに飛びのき避ける

「お前の事なんか知ってたんだ!!」

軽くイラついていた

会う奴会う奴そんな事言いやがる

自分の知らない奴が俺を知っているってのはストレスになる

「…馬鹿は死んでも治らないを体で表してるなお前は」

黒い剣を構える

「俺は、」

言葉を区切り、俺に向かってくる！

「サイスだ！」

飛ぶようにして、俺に向かって走ってくる

早い——！

「ッ！」

「遅い」

気付いた時には、後ろに立たれていた

「…ははっ」

あまりに衝撃的過ぎて笑えてきた

こんな状況なるとはな

エイミを握りなおす

「お前、弱くなったな」

なんつー言われようだ

そもそもこんな状況で全力出せるやつの方が凄い

「…」

サイスが無言でいる

「…？」

気付いたがこいつは、俺を倒す…殺そうとしてない感じがある

実際持つてるのは人を切れる獲物だ、目の前にはそれを証明するものが転がっている

そんなものを持っているにも関わらず、俺を殺そうとしない

そもそも殺されそうになれば、俺自身緊張でこんな…

？

なんで俺はそんな事知ってるんだ…？

「そろそろ…か」

サイスが呟く

牢屋の中にはもう誰もいない

逃げるまでの時間を稼いでたのか

「さて、じゃあ俺も下がるか」

スッ、と後ろから気配が消える

――振り向けば、サイスの姿はもうなかった

「……」

サイスが去った後他の騎士団のメンバーに”後始末”を任して、アネットと二人で上に上がって来た

「逃げると言っただろ！」

怒鳴られた

廊下のだ真ん中だったので何事かと城の人間から遠巻きに眺められる

「……あそこで逃げるわけにも行かないだろ」

「お前なあ……」

呆れた様子

「まあいい……お前が来てくれたお陰で”一人”で済んだ」
”一人”ってのは多分……

「すまなかったな、こんな事になると思わなかった」

アネットに謝られてしまう

「な、なんでお前が謝るんだよ」

「相手が悪かった…普通の相手ならお前に任せようと思って呼びに行っただ」

エイミと同じ事考えてたのかよ…

「すまなかった」

「いいつて、もう…な？」

「ああ…」

アネットが顔あげる

「だからって、お前が私の命令無視したのは忘れないからな」

うわぁ…

そもそも逃げようにもサイスの動き早すぎたのもあってどうしようもなかったんだよね…

………

その後

アネットは沙織への報告に向かい

俺は俺で自室に戻っていた

目を瞑れば

あの光景が思い浮かび、落ち着くこともできない

「大丈夫か、主？」

「……」

エイミがまた主に呼び直していた

「……どうした、主？」

「呼び方さ一樹でいいって、めんどくさいだら言い換えるの？」

そう言った後、エイミが

「二人でそうしよって決めただろ」

何故がエイミが不機嫌になった

「……そんな事決めたっけ？」

まったく記憶にありやしない

「ッ——！」

秘密にしていた事がばれてしまったかのような

「い、言ったんだ！お前がそう言った！」

逆ギレ気味に言ってくる

しかもお前呼ばわりされてるし

「じ、じゃあ…せめてその主ってのをやめてくれよ…なんか慣れないしさ、そういうの」

「それもお前が…そうか…」

何か思い出した様子

「少し待っている」

そう言っつて、エイミは出て行った

あいつなに怒ってたんだ…？

つか何する気だよ…機嫌悪かったみたいだし

な、なんか怖いな…

「おい！」

アネットが制止してくる

「すぐ終わる、それまで話は中断だ」

我ながら勝手だと思いがあいつが呼称を認めるならやるしかない

「どうしたの？」

姫が子供をあやすような対応する…腹が立つやつだ

「あの服は何処だ」

「…？」

よくわかってないらしい

「この城の給仕の服だ！」

「ああ、あれね…って、なんで？」

聞き返される

「主の為だ」

そう言つと、姫が

「兄さんが！？なんで！？」

声を荒げる…主の事になると人が変わるな…

「…前の事、お前なら覚えているだろ」

「へ…？」

何かを考え思い出したようだ

「あー、そつかそつかー…なーんか違和感あるなーって思ってたのよねえ」

何を今更

「…でも、そんな事して大丈夫？」

…こいつも、やはり心配しているのか

「前は大丈夫だった」

「だからって今回も大丈夫かな…」

悩んでいたが、やがて

「しょうがないか…色んな人見て未だ大丈夫みたいだし…いいよ」

そう言うのアネットに

「悪いんだけど、給仕の服…この子に合うの用意できるかな？」

そう言いながら私の肩を持つ

「給仕の服…？」

「うん」

アネットは困った様子だったが、何も言わずに取りに行ってくれた

「エイミも兄さんの事好きだねー」

アネットが居なくなつた途端そんな事を言いだす

「何が兄さんだ、少し前までお兄ちゃんお兄ちゃん言つてた奴が」

こいつが主と距離を取っていたのは知っている、必要な事ではなかったが…あの女に感付かれても面倒な事になつただけかもな…

「今更言い直すのもなんか恥ずかしいしさ」

そういうものか…？

まあ私も今更主から言い直すの恥ずかしいし、嫌だからこんな事してるのだが

「…」

主は私のあの格好を見てご主人様と呼べと言った

恥ずかしいから嫌だと言ったら、主と呼べと言った

だから主と呼ぶようになった

一樹は自分である為に一樹と呼べと言った

そして私は痛みを忘れる為に愛する一樹の名を呼んだ
だから私は

この呼び方が好きだった

それをあいつは…

まあ忘れてるし、仕方ない事だが

こればかりは、やっぱり譲れない

このやり取りも何回かやった覚えがある

だが…やはり私はこの事を忘れていた

力が弱まっているからか

主と過ごした日々は昨日の様に思い出せる…

つもりだったが、実際はこうだ

私より、正式な”血”が流れている姫は全て覚えているのだろう

私は虚ろだ、だから主の為に生きたい

あの人を守るのが私の生き甲斐だ

そんな取り留めもなく…何回も…何百回もしたのであろう思考

「姫」

アネットが戻って来た事で中断する

…この娘は何も覚えていない

主と過ごした日々、覚えているのがいい事が覚えていない事がいい事か、それはわからない

だけど私は

「エイミ、これでいい？」

姫が給仕の服…主いわくメイド服を私の体にあてがう

「ああ」

今、幸せだ

これを見て主はどんな反応をするだろうか

そんな事を考える…

「はあ…」

エイミが何を考えて出ていったのかわからない

なにか嫌な予感がする…

「主」

扉の外から声が聞こえる

そして、幸か不幸か…予感は的中した

「こ、これで…どうだ…？」

なにがどうなのかイマイチわからないが、扉を開けて入って来たエイミに度肝を抜かれた

「な、なにその服？」

それはどう見てもメイド服だった

かといって、元の世界でよく見たミニスカートのメイド服ではなくロングスカート…それも黒を基調とした、どちらかというとゴシックロリータに近い色合いのメイド服

胸元は白のレース調であしらわれ、エプロンは腰に巻くタイプのやつだ

そんな的確に俺の心を掴んだこの服装

見覚えがあると思ったが、この城の給仕さんの服だった…エイミが着たせいかとてつもない

っていうか、こんな低身長のエイミに合うサイズがよくあったな…

「こ、これでもまだ…主と呼んではいけないか…？」

「――」

これはダメだ

さっきまでの憂鬱とした気分が一気に晴れやかになる

「主…？」

ハッ！？

あまりにも衝撃的だったので見とれてしまった

「い、いいと思うよ」

発せれた一言がなんとも情けない

「ふっ」

何故か勝ち誇った笑みを見せる

「やはり、主は主だ…！」

「うおっ！」

突進して頭突きをかまされる

身長差のせいで鳩尾に綺麗に入った…！

「おおお…！」

うめき声をあげながらうずくまる俺

今、気付いたがエイミは頭突きしてきたのではなく抱きついて来た
みたいだった

「あ、主…！？」

エイミが支えてくれる

「大丈夫、か…？」

「お、おう」

絞りだしたような声になる

そのままなんとかベッドの上に倒れこむ

その横にエイミが座る

…この格好のまま過ごすつもりなのか

っていうか…同じ部屋なんだよな…？

これは…精神が持つのだろうか…

元の世界に戻る希望も無い今、梓が居る事をすっかり忘れていた

「…」

何してるのかな…？

「主…？」

わざとなのか天然なのか

とてつもなく可愛いらしい

ある意味戦いである意味拷問だ…

こんな調子で大丈夫なのかな…

|

遭遇（後書き）

さーて選挙はどうなるかなー？民主だけはほんとやめてください

非日常（前書き）

もうすぐ9月です

非日常

「あと一周!」

一番前を走ってるアネットの音が響く

「はあ…はあ…」

日々のスタミナ作りに毎日走らせられる

周りの七割は女

この国は男より女の方が強い

…らしい

どう強いのかアネットに聞いた所

女性は生命を宿す身体であり、強い精神力を持つ事があるらしい

傷を治してもらったりしたフィアはその最たる存在らしい

あの年齢で相応の実力があり、王国の医師としてこの城にいたとか

…よくわからんが、まあそういう事らしい

あの魔法みたいな力は精神力であり、潜在能力と言われている

まあ女の人が潜在能力強いってだけで男が使えないわけじゃないら

しいが

「はあはあ……！」

そんな事を思考していたら、いつのまにか最後の一周は終わっていた

――

そもそも訓練しているのは俺が狙われても生き残る為らしいのだが

「あー」

部屋のベッドで仰向けになる

…まだ狙われてる実感がない

俺自身、戦った事がないからなのもあるんだろうが…

エイミを持って人に振るう事が出来るのか、わからない

「どうした？」

そんな事を考えていたせいか、エイミの事を見つめていたみたいだ

「いや…いつまでその服なんだ？」

メイド服のまま、着替えようとしな

「な、なんだ…ダメなのか？」

メイドっぽい行動もせず、いつも食っちゃ寝しているのがなんとい
うか…

「いや、似合ってるしいいけどさ」

「そ、そうか…」

褒められたのが嬉しいのか、エイミは頬を染める

まあ、いいか…

………

次の日

「行くぞ」

起き抜けからアネットとの打ち合いが始まる

「…！」

アネットの重心が下がり一瞬視界から消える

「っ！」

木刀を握る力を込める

「ふっ」

どう打ってくるかよく見る

「…ッ！」

なんとか見切りアネットの初撃を防ぐ

「うつ…わ」

一撃がかなり重い…！

「くっ！」

アネットの木刀を弾く

そのままアネットは後ろにかなり飛んで下がる

普通にアネットの身体能力が高すぎて飛ぶだけで五メートルくらい距離が出来る

こいつの身体能力はわかってるのでそれを見越して俺は前に一步、二歩と飛ぶように走り

「はあ…！」

アネットが着地する前に木刀を突きに構える

「なっ！？」

突きの姿勢に入った俺に向かってアネットも着地すると同時にそのまま突きの体制に入る

…嘘だろ？

「ふんっ！」

全力で一氣に突く…が

「ダメだな」

アネットも同じ突き…しかも片手で俺の突きを真正面から”突きで止めた”

「おいおい」

うちの爺さん並の事しやがる…

「ほら、次はどうするんだ？」

こんな奴相手にほんとどうしろと

………

「今日はこれで終わりだ」

何度もこなしている内に、途中でばてる事はなくなった

「はあ、はあ、はあ」

息を整える

「いいか？」

俺が息を整えるのを待ってから話し掛けてくる

「明日は大丈夫か？」

「…？」

いきなりすぎて訳が分からない

「明日、私の部下と試合をしてもらおうと思っている」

「…は？」

アネットの部下って事は王国騎士の人間か

「試合って…ええ？」

「お前は我流の色合いが強い、私だけではなく色んな者と戦った方がお前にとっては学ぶ事も多いだろう」

「…明日？」

「なんだ、都合が悪いのか？」

「いや…そういう訳じゃないけど」

アネットとの打ち合いは毎日あるわけじゃないから疲れ抜けない内に明日もこんな風になるのかって思うと…

「…しょうがない、明後日に伸ばしてやる」

「まぢで!?!」

「どうせ疲れてるんだろ?」

「う…」

「まあいいさ…だが」

「うん?」

「敵がいつも全快の時に来るとも限らない、それは覚えておけ」

「…わかった」

………

部屋に戻れば

「すうー…」

エイミがベッドの上で寝ていた

いつもメイド服なのでスカートが捲れあがっているが…

「色気の欠片もないな…」

へそが見える位置まで捲れあがっているからまた色気が…無い

「はあ」

エイミをベッドの端に追いやり、自分のスペースを確保する

「なんで二人で一つなんだよ…」

エイミが寝ていたせいかベッドが暖かい

2日後

試合場と言う場所があるらしく

文字どおり試合をする場なんだが、位置は外の訓練場から少し奥にある

そして、そこにエイミと二人で向かい着いた訳だが

「…」

木刀を携えたあからさまに不機嫌な顔をして俺を睨んでくる女とアネットが居た

「また” なにかしたのか？」

「また” ってなんだよ” また” って」

エイミの目には俺がどんな風に映ってるのか小一時間問い詰めてや

りたい

「ん…ああ、来たか」

アネットが俺達に気付いたみたいだ

「…」

すんげえ睨んまれてる

「こいつが私の部下の…おい」

アネットが自分で紹介するように促す

「あ、はいお姉様…」

お姉様…？

「私は、リリイ・タスクだ」

アネットに言われたから仕方なく、それもまた不機嫌な様子で言うてくる

「あ、ああ…俺は一樹だ、こっちがエイミ」

エイミの頭に手を乗せる

「な、なんだ」

「いい位置にあるんだよ」

そのままぼむぼむと頭を撫でる

「ん…」

猫みたいな奴だなこいつ…

「相手はリリイだ、それと今日は真剣…エイミを使って戦え」

「は？なんで？」

「お前は今までエイミをまともに使った事ないだろう？」

「ちげーよ、そっちじゃねえって」

リリイの木刀を指差す

「ああ…そうか、まあヒントを一つやろう」

何故か得意気な顔になるアネット

「見た目に騙されれば、お前の負けだ」

そんな事を言われる

見た目に騙されるなって言われても…まんま木刀にしか見えないし…

「主、どうするんだ？」

「アネットがああ言ってるんだ、行くぞ」

「…ああ！」

エイミが光りだし、鋭い刀の姿に変わって行く

「毎回思っただけど、お前抜き身だから危ないんだよな」

地面に突き刺さったエイミを引き抜く

「しょうがないだろ、一樹がしっかり扱えば大丈夫だ」

しっかり一樹って言い直してるし…

「準備はいいのか？」

「ああ」

エイミを一振り

「あんまり振るな、気持ち悪くなる」

…なんて剣だ

「…」

スッと、目の前に立っていたリリイの目の色が変わる

「始めだ！」

アネットが合図をすると同時に

「…！」

リリイがかなりのスピードで飛んで来た！

「一樹、下から来る」

「！」

エイミに言われた通り下段からの攻撃に注意する

「ッ！」

リリイの木刀が下段から勢いよく俺の顎を狙ってくる

それを受け流そうとして

誤った

「うわ！？」

いきなり木刀から無数の尖った枝の様なモノが伸びて来た

なんとかエイミを振って枝を切り捨てるが、何本か残って頬を掠めた

「ちょっと…待てよこいつ殺す気で戦ってるだろ！？」

アネットに抗議するが

「寸度目で止めるように言っている、ちょっとした傷くらいで騒ぐ者

があるか」

そんな事言われても…こいつ殺気が尋常じゃないだろ…

「リリイ、多少は手加減してやれよ」

「はい！お姉様！」

アネットに返事する時だけ殺気が消える、が

「ギンッ！」

と音がしそうなくらい俺を睨み瞬間で殺気が復活する

「うう…」

こいつ怖い…

枝が伸びて木刀が釘バットみたいになってるし

「一樹、さっきのヒント覚えておけよ」

見た目に騙されるなってやつか…？

「一樹、あいつの能力…かなり特殊だ」

能力…？

ああ…そうか、王国騎士はなにかしら能力の発現が必要だからな…

「なんだよ、特殊って」

「普通能力なら私には知覚出来る、がこいつの場合出来ない」

「…どういう事だ？」

「わからん…かなり特殊な能力だ」

「あんま参考にならん」

「…帰ったら覚えてろ」

酷い事言いよる

「…」

向かい合ったままりリイは動かない

「…一樹！後ろだ！」

「う…わぁ！？」

何かに足を取られる

見てみると草が俺の足に絡んでいた

「なんだ、これ」

足を抜こうにもかなり絡まっついていて足が抜けない

「…こんなものか」

リリイが冷めた顔をしている

…これ、あいつがやったのか

リリイが俺に近づく

「お姉様が気に入っているみたいだし、期待していたが…」

アネットに聞こえないくらいの声量で言ってくる

「興冷めだ」

木刀を向けてくる

「ここで殺してやってもいいんだぞ」

――！

そう、か

やっぱり、わかってなかったみたいだ

戦うってこういう事だ

命の取り合いだ

こいつはアネットの言葉があるから俺を殺す事はないと、何処か緩

く”試合”をしていたのだろう

だが、リリイの”死合い”は違う

殺気を持ち、本気で俺を殺す寸前まで戦うつもりだろう

「…くそ」

こんなもん、やってられっか

「さっさと終わらせてやる！」

何が興冷めだ、ムカついた

こいつの殺気に恐怖する前に…終わらせる！

「っ—」

姿勢を低くして足に絡まっている草をエイミで切り捨てる

「ちっ」

リリイが舌打ちをする

「おい」

エイミをリリイに向ける

「何が興冷めだ、こちらアネットに無駄に鍛えられてんだ…お前
なんかにやられるか」

「
…」

目の前のリリイからブチッと何かが切れた…音がした

「 ”無駄” に…だと? 」

「 はあ…? 」

「 お姉様との訓練を…二人きりの時間を ”無駄” だと…! 」

なんか知らないけどキレてるーーーーーッ!?

今までの殺気と比べものにならないくらいになっている

「 ちょ、待て…どうした 」

この殺気はやばい

こいつ…本気で俺を殺る気だ…!

「 り、リリイ? 」

アネットが止めようとする

「 大丈夫です…馬鹿は死ねば治るらしいですから 」

…ダメだこいつ

「 …やば 」

さっきから思ってたが、こいつはやっぱり…

「お姉様に群がるハエは私が駆除する」

百合…なのか…？

「…ッ！」

今までないスピードで俺に飛んで来た

「うわっ！？」

力任せの一振り、避けたつもりが枝に引っ掛かり皮膚が破れる

「くそっ！」

エイミを構え直す

目の前にリリイを据える

くそ

変な勢いで出てきた殺気だが緊張で切っ先がブレる

「ッ！」

リリイが一振りすると木刀の枝が更に伸びた

ただの木刀なんだからエイミで折れる…とは思ってたが、あの異常

なまでに伸びた枝が邪魔だな

「一樹、どけ！」

アネットが助けに入ってくれる

「アネット！」

それを制止する

「ヤバくなったら逃げるし、大丈夫だって」

「一樹……」

アネットが下がってくれる

「どうするつもりだ？」

エイミが聞いてくる

「知るかよ、なんとかなるだろ」

「お前は……」

飽きた様に言われる

リリイが足を踏み込む

「いいか、動くなよ」

エイミが勝手な事を言う

「はあ？どういうこと…」

どういうことだよ…と言い終わる前にエイミを持つ右手に熱を感じる

視線を落とせばエイミの刀身が青白く光っていた

「うわっ」

足下から魔法陣みたいなのが広がる

「な、んだこれ…？」

「いいか、これはお前の力だ…引き出せるとこまで私が引き出す」

「は、はあ…？」

「イメージだ、勝つ事を考えろ、次の一撃であの女を倒せ」

リリイが土煙を上げ向かってくる

イメージ…？

次の一撃つつたってまったく想像出来ない

足下も魔法陣みたいなものになんのかわかんねーし…

…魔法陣？

魔法…か

イメージ…イメージ…

次の一撃…か

考えろ、考えろ…ラノベ読者だろ、こんなファンタジー大好物じゃねーか

いける、いける、いける…！

「一樹、いいか！？」

「ああ！」

エイミに気を集める

集めると言っても本当にイメージだけだ

だがそのイメージにだんだん現実味が出てくる…！

刀身の青白い光から赤紫の色が広がる

「！…！！」

そして、そのままエイミを振り上げる

リリィはもう目前まで迫っている

イメージだ、あんな木の枝なんかへし折ればいい

…だけど

もしイメージ以上の威力で

リリイに当たったら？

ダメだ

イメージだ、威力を抑える気絶させればいい！

「くそ、がああああ！！」

体のバネを使い、エイミを一気に振り下ろす

振り下ろした後には光の軌跡が現れ、そこから出来た光の柱がリリイに向かう！

「なっ！？」

リリイが驚いた顔をする

が

「ちいっ！」

また舌打ちをして、横っ飛びをしてギリギリで避けられた！

「まーぢかよ！？」

その瞬間、ぐらりと世界が歪んだ

「うおっ…と…」

膝を着いてしまう

「一樹！」

アネットが駆け寄って来て、エイミは刀から人の姿に戻っている

「リリイ！」

アネットがリリイを叱り付けると、リリイは悪戯がバレた子供のようにしゅんとなる

そんな姿を見ながら

意識が落ちた

多分、あんな一撃を打ったからだろうか

ラノベでよくある展開だ、主人公が全力で放った一撃の後に倒れるなんて

「あつつつ」

目覚めてから思ったのはそんな事だった

「はあ」

自室のベッド

「よつと」

立ち上がれる

「…どうするか」

エイミも居ない

沙織は仕事忙しいからまともに会えないし…

アネットが自室に居るとも限らないし…

エイミを待つか、アネットに会いに行くか悩んでいたその時

「…ん？」

扉がノックされる

挨拶する前に扉が開かれた

「…なんだ、生きてたのか」

リリイだった

会った瞬間なんて奴だ

「お陰様でな、お前こそ大丈夫か？」

「擦りもしてないが」

…最悪だ

「…なんか用か？」

何か言い出したそうだったので聞いてみる

「…悪かったな」

「ああ…いいよ、別に」

「…一つ言っておくが」

「ん？」

「私はお前の事が大嫌いだ」

うーわー

「それでは、私は戻るからな」

「え、ちよっ」

止めようとするが

「なんだ、お前も来てたのか」

アネットがノックも無しに入って来た

「姉様っ」

一気に顔が明るくなるリリィ

「また来てたのか」

アネットの後ろにはエイミが居た

「…また？」

「主は昨日から一日中倒れてたからな」

…まぢかよ

「打ち所が悪かったのか心配してたんだぞ？」

アネットがリリィを見る

「こつちを見るな気持ち悪い」

酷すぎる！

でも…

「ありがとな」

何回も心配して来てくれたのだろう

「…私は、お前が、嫌いだ」

区切られて言われる程嫌われてるのかよ

「それと、私はお前の心配なんかしていない」

耳を引っ張られる

「二人が居なければお前の寝首を切っていたところだ」

小声でそんな事を言う…ダメだこいつ

「姉様、私は戻ります」

「ん…そうか、じゃあ私も戻るか」

リリーの顔が明るくなる

「さあ行きましょう!」

「引っ張るな!一樹、身体を労れよ」

「お、おう…じゃあな」

扉が閉まる

「リリー・タスクねえ…」

ヤバい奴と知り合ったもんだ…

っていうかもしかして王国騎士ってあんなやつらばかりなんじゃないだろうな…

「あー」

…これは…怖い

非日常（後書き）

今回は新キャラですね、リリィ・タスクです…百合なツンデレです…多分ツンデレです…きっと…僅かに…ツンデレ…なのかなあ

王国騎士（前書き）

しばらく更新出来ませんでしたでしたが久しぶりです

王国騎士

朝目覚める

エイミは隣で睡眠

「…なんか仕事しろよ」

訓練に向かう

………

訓練場に着くと、他のメンバーは集まって居た

王国騎士は全20の部隊で別れていて、隔週で中にある訓練場と外の訓練場を使う

一つの部隊につき、5人〜8人

全170人居る

姫と王国内部の守り、見回りはこの170人でやる事になっている

「んっ、んっ」

準備運動のストレッチを軽くしておく

今回は1〜10の部隊までは外の訓練場

俺はアネットの部隊に所属しているんだが…今だに部隊のメンバーが誰かわかっていない

一つの部隊で集まる事自体が少ない、基本は俺が部隊に入ったばかりでアネットと二人で行動する事が多い

アネットの部下と言う事であの鬼女ことリリイは多分同じ部隊だろう

俺とアネット、リリイで三人だ

少なくとも後二人は同じ部隊のやつが居る筈なんだが

「…誰だろ」

周りを見回しても知らない奴ばかり

リリイを見つけたが

「…」

無言でこっちへ来るなオーラをバリバリ出してやがる

………

訓練教官はアネットの担当になっている

いつもの様に訓練場を走る事から始まる

それが終われば

基礎鍛練

腹筋や背筋、腕立て伏せにスクワット

あらゆる基礎的の鍛練をする

次に木刀の素振り

重心がブレていたり、姿勢がままならない場合はアネットに指摘箇所を直される（ほとんど俺だけが）

そんな訓練を朝から夕方過ぎまでやる

.....

「...疲れた」

部屋に戻ってベッドに寝転ぶ

朝から訓練に出て戻って来たにも関わらずエイミは未だ寝ている

飯は食堂が開いており、常時なにかしら食べ物があるのでいつでも行ける

そのせいか訓練が終わってから軽く寝て、深夜にエイミと飯を食べるまた寝るというあまりにも不規則な生活が続いている

今日の食事は野菜スープと肉を挟んだハンバーガーみたいな食べ物

「あんぐっ」

でかい口を開けて嚙り付く

「なかなか美味しい」

ソースがトマト風味？な感じ、少しあっさりしてる気がするが肉厚でボリュームもあり食べごたえはある

「……」

周りにも何人か人は居た

食堂は色んな人間が使う

俺達みたいな王国騎士の人間もいれば城で働く人間も来る

沙織みたいな上に立つ人間は部屋に料理を持ち運ばせてるようだ

まあ沙織自身は普通に食堂で食べたいらしいんだが、上に立つ者として一応そういう暮らし方しなければならぬらしい

…なかなかめんどくさそうな生活だ

「ふう……」っそさん

スープを飲み干す

「おまつ、早いぞ！」

エイミはまだ半分までしか食べていない

「待つてるからはよ食え」

「はあ…」

何故かため息をつかれる

「ゆっくり食べれる時にはゆっくり食べるべきだぞ」

…言う程早く食べた覚えもないのだが

……………

エイミが食べ終わり、大浴場に向かう

この世界でも風呂があるというのには軽く驚いた

なんとなくこういう所では水浴びだけな気がしていたからだ

まあ、アネットやエイミの話ではこの世界に来るのは俺が初めてな訳でもないらしいしこういうのが合っても不思議ではない

「はあ」

ゆっくり湯船に浸かる

昼間にここは掃除されるが、それ以外は基本開放されている

男風呂、女風呂分かれているので好きな時間に入れる

城内部に住まう人間は一人一人過ごし方が違うのでほとんどの施設

は一日中開放されていたりする

俺に与えられているのは客間なので、そこら辺を考慮してか自室に風呂はある

だけどたまにはでかい風呂に入りたい

エイミなんかは一人でゆつくりするのが好きみたいなんで、もっぱら入るのは自室だ

.....

一時間くらいブーツとした後、風呂から上がる

そして着替え終わり、脱衣場から出る

「ふう」

廊下が涼しい

「だあああああ!!!!」

そんな事考えながら部屋に戻ろうとしていると、風の如く風呂場に突入する奴がいた

「おい!」

声をかけられる

「リリイ...?」

いつもは邪魔なのか髪の毛を結んでいるリリィが風呂上がりなのか
下ろしている

「どうしたんだ？」

「中に誰が入ったか？」

「ん…ああ」

「悪いが、そいつを摘み出して来てくれないか」

そんな事を言われる

「なんで？」

「覗きだ」

うわぁ…

今どき風呂場を覗きとかする奴居るのかよ…

「で、なに…そいつ連れてくればいいの？」

「ああ」

「はあ…ちょっと待ってろ」

………

また脱衣場に戻る

「おーい、覗き出てこーい」

「覗き言っな！」

風呂場からそんな返しが帰ってくる

「…あー、なんだお迎え来てるぞ」

風呂場から一人の男が出てきた

「追い返してくれよ…」

すぎるような目…男だからかまったく嬉しくない

「追い返すって言ってもなあ…」

あいつキレると怖いし…

「覗きなんだろ？お前が悪い、それでいいだろ」

首根っこ掴んで引き摺る

「だああああ待て待て待て待て！！」

じたばた暴れだす

「んだよ、俺は早く帰って寝たいんだよ…」

「ここで捕まったらダメなんだって！部隊内ですらその事でネチネチ言われるの嫌なんだよ」

ネチネチ言われるのはこいつが悪いからなんだろうが…

「…お前リリイと一緒にの部隊なのか？」

「あ？そうだけど…？」

こいつが俺と同じ部隊の奴かよ

リリイに加えて変態とはまたキャラがキツイ部隊だなあ…

「なんで覗きなんかしたんだよ…？」

「だって知ってる女の裸って興奮するだろ！」

首根っこ掴んで引き摺る

「待て待て待て待て待てって！」

どんだけ待たせたいんだこいつは

「頼むって…なあ？同じ男だろ？助け合いだろ？」

めんどくさいなあ…

「…わーったよ、ここにいる」

「マチで！？サンキュー！」

早く帰って寝たいのに…

………

脱衣場から出るとリリイが鬼の様な顔をして立っていた

「悪いけど、居なかったわ」

「…お前、隠してるのか？」

うわーバレてるー

「あー…」

「隠し立てるとお前も不幸な目にあうぞ…？」

………

「リリイ帰ったぞ」

「うおっし！ナイスだ！」

肩を叩かれる

「あんた名前は？」

「一樹だけど…」

「一樹か、俺はカノンだカノン・バツセア」

「そ、そうか」

「じゃあな、恩に着るぜ」

そう言つて脱衣場の扉を開け出ていく

「やっと出て来たか」

リリイの聲がここまで聞こえてくる

「え、ちょっ！はあ！？」

カノンが驚いた声を出す

「おおおい！一樹！どういう事だ！こんの裏切り者！あ、うああ
あああ！！！！」

悲鳴と恐怖が入り交じった声が遠ざかつて行く

脱衣場の外にもう二人の姿が無かった

.....

「お帰り」

部屋に戻るとエイミはホットミルクをちびちび飲んでいた

食堂から持って来たのか...

「ほら、主も飲め」

笑顔で渡される

「ありがとう」

ホットミルクと言ってもこの世界に牛はいない…まあ牛みたいなのがいるが、なんの乳なのかわからない

皆飲んでるし害はないだろう…元の世界で飲んでいた牛乳より美味しいのがそう思わせるのもある

「…ずずっ」

音を立てて飲む

「あちっ…」

猫舌なのか毎回そんな事を言っている

食べ物も飲み物も元の世界とあまり変わらないのに何処か違う…なんか不思議だ

………

次の日、アネットと街に出ていた

今日訓練は休み

街全体も把握したし出る必要も無かったのだが、今回は部隊として街の見回りだ

アネットに案内してもらっていた時も見回りのついでだったのだが、俺としては初めて見るものばかりであり見回りとしての印象はなかった

「つか、見回りってする必要あんの？」

「…お前は…」

頭を抱えられる

「…まあ、見回り自体は警戒の意味でやっているのはお前でもわかるだろ？」

「お前は俺の事を猿かなんかと勘違いしてないか？」

「街を見回る理由はそれともう一つある」

華麗にスルーされた！

「国に居る住民達を安心させるのももう一つの理由だ」

「安心…？」

「この国も結構な歴史だ、敵も多いからな…よく内部で戦闘があったりする」

「ふん…」

物騒な話だな…

「って、それって俺が狙われてるせいもあるんじゃないのか？」

「まあな」

うわぁ…

………

結局その日は何事も無く見回りは終わった

「そう言えば、お前まだ部隊の奴らと会った事ないだろう？」

「ああ」

「一応、お前の事は話を通してあるんだが…そろそろ面通ししておいた方がいいかもな」

カノンとかリリイとか…変な奴らばっかな気がするんだが…

「どうした？」

「なんでもないです…」

………

訓練の日

いつもより早めに行く事になっていた

アネットがメンバーを紹介してくれるらしい

「ああああ……！」

カノンが大声をあげる

「裏切り者……！」

なんて言われようだ

「知り合いなのか？」

アネットがカノンとリリィ……あともう一人、白髪の子を連れて来ていた

「あー……まあな」

「そうか……じゃあ、二人はもういいか」

アネットが後ろに立っていた白髪の子の肩を持つ

「は、ひ……！」

俺の前に押される形でくる

「あ、えと……る、ルチア……コムーネ……ですっ！」

「あ、ああ……」

緊張かなんなのか、顔が真っ赤に染まり下を向いてしまう

「ルチアは恥ずかしがり屋だから」

カノンが言う

「えーと…一樹だ、よろしく」

精一杯の笑顔

「は、はひ！」

物凄い勢いで後退される

俺の笑顔はなんなんだ

「あと二人居るんだが…一人は今外に出ている、もう一人は…まあ気分屋なんだ、そのうち会う事もあるだろう」

投げやりだなおい

「つーかまとまりがねーな、この部隊は」

「バカにしているのか…？」

「お前は俺が何か言ったらそういう風にとらえる訓練でもしてるの

か？」

ここに来てリリイが言葉を発する…こいつは被害妄想癖があるのか？

まあ俺の言い方も悪かったのだが

「一人は戻って来たら改めて紹介する」

「わかった」

「それと…一樹、少しの間リリイと行動できるか？」

「んなつ！？」

俺が驚いたと同時にリリイが変な声を出す

「な、なんでだよ？」

「用事が出来てな、私が外に出ないといけなくなった」

なんてこった

「しばらく訓練つけられなくなるが…まあ2、3日で帰ってくる」

「で、でも姉様！」

リリイが抗議しようとするが

「頼まれてくれるか？」

「はいっ！」

条件反射並みのスピードで答える

………

明日の朝からアネットは出発する

アネットのいない間はリリイと二人で見回りをする

…リリイがキレて刺されないか心配なんだが

アネットが出る程の用事と言つのがどの程度のものなのか

軽く嫌な予感とする

………

朝

憂鬱だ…

「どうした主？」

エイミに心配される

「…エイミに言っでなかったが今日からしばらくリリイと一緒にだ」

「あー…主が苦手そうなあのか」

「別に苦手じゃねえよ」

「そうかそうか」

…なんか腹立つな

………

部隊にはそれぞれ一部屋設けられる

ミーティングや、部隊内での待ち合わせ、その他色々の部屋で行う

で、その部屋でリリイと待ち合わせしているんだが

「来ねえ」

待ち合わせの時間

10分くらい過ぎている

「はあ…」

そんなに嫌われてるのか？

「主、どうする？」

「どうするったって…」

待つしかないんだが

「…寝ていいか？」

ベンチに寝転ぶエイミ

「あー、寝てる寝てる」

「ふあ…後で起こしてくれ…」

「…」

よく考えたら普通逆じゃねーか？

………

30分後

こんな事ならリリイの部屋の場所聞いておけばよかった

「ふああ」

エイミの寝顔を見てたら眠くなってきた

ふわふわとしたまま、あくびが止まらなくなってしまう

眠さが高まって来てベンチに寝転ぼうとして…

パンツと勢いよく扉が開いた

「す、まない！！」

リリイが息を切らしながら入って来た

ばさばさの髪でポニーテールに結ぶ前なのか結んで失敗したのか、
リボンが髪に絡まった風になっている

「んあ…あー、リリイか…」

眠気がいい感じに来ていたので一瞬誰だかわからなかった

「はあ、はあ…ね、寝坊してしまった」

こいつ案外ドジやらかすんだな…

「まあ、それはいいから…早く髪結べ」

「え？…ああ！？」

…この反応だと結んで失敗したんだろうな

……………

髪を結び直したりリリイを連れて街を進む

「…」

さっきまであんなに可愛かったのにまた無言に戻ったりリリイ

「…なんだ？」

そして冷たい

「…今日さ、朝来なかったから嫌われたのかと思ったぞ」

朝の事をぶり返されたからなのか不機嫌な顔をしながら

「…嫌いは嫌いだ、お姉様に頼まれたから約束を守っただけだ」

そんな事を言う

「さいですか…」

「お前こそ私の事が嫌いだろう？」

こつちも見ずに真正面を向いたままそんな事を言ってくる…ちゃん
と警備しとんのかこいつわ

「…って、誰がお前の事嫌いだって言っただよ」

「…」

こいつは何を言ってるんだ？って顔だ

「俺は、お前のこと嫌いじゃないぞ」

「あ、そう」

なんてやつだ…！

「主」

「あー、なんじゃいなんじゃい」

「主」

後ろを歩いていた刀の少女があいつに声をかける

「あーなんじゃいなんじゃい」

少女は屋台にあいつを連れていく

「はあ…」

警備なのに何を考えてるんだあいつらは…

だいたい…

私が思っていた伝説と違いすぎる

この国では有名なあの伝説

あいつがそれに該当するらしいが…信じられない

アネット姉様もあいつの事は気に掛けていた

「…」

本当にあいつが…

ガーディアンなのか…？

「エイミ…それが最後だからな」

「むう…」

目につく食べ物に片っ端から食べに行くので言っておかないと金が無くなるまで無尽蔵に食べる気がする

俺の手持ちの金は王国騎士として一応貰ってはいるが、ほとんどエイミの外での食費になっていく

恐ろしい子だ

「…リリイ？」

さっきから微妙に不機嫌なままのリリイ

「なんだ？」

言葉にトゲがある…

「怒ってる…？」

「別に…そろそろ見回り終わらせるぞ」

「あ、ああ」

.....

「はあ」

部屋に戻ってきてすぐにため息

「どうしてそこまで嫌うかねえ……」

俺がなんかやったのか？

「うーん……」

わからん

.....

王国騎士（後書き）

前書き通りしばらく更新してませんでしたね、どう書くか悩んでいたのと学校やら仕事始まつたりであんま書けませんでした。さて、なんだかんだで13000アクセスです、なんとも稚拙で下手な文章ですがどうもありがとうございます。まあここまで読んでくれる人がいるのかわかりませんが（笑）まあ自己満小説なんでえr y、なんとも最近この言葉に逃げすぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8925g/>

ファントムガーディアン

2010年10月10日19時25分発行